

主 題：モーセの召し1

聖書箇所：出エジプト記3章1－12節

旧約聖書、申命記の最後に、モーセが亡くなった記事が書かれた後このように書かれています。34：10「**モーセのような預言者は、もう再びイスラエルには起こらなかった。彼を主は、顔と顔とを合わせて選び出された。**」。人類の歴史上、最も偉大な信仰者の一人であり、また、200万人とも言われるイスラエルの民をエジプトから連れ上ったモーセ、彼ほどの大きな影響を多くの人々に与えるようなことはなくても、「神様に用いられたい!」「神様にお仕えしたい!」という願いはすべてのクリスチャンたちが持っているのではないのでしょうか? 以前、私は「神学校に行きさえすれば霊的になる…」「神学校を卒業したら、ある程度の質問にも的確に答えられるようになり、より神様に用いられるようになる…」「神様に大いに用いられるためには、より聖書の学び(=知識)を蓄えないといけない…」と、何となくそのように考えてしまっていたように思います。しかし、あのムーディ聖書学院を創設したドワイド・ムーディにしても、また、キリスト教の歴史を見ても、また、現在、教会や社会で活躍しておられるクリスチャンの方々を見ても、そして、特にみことばの中に出てくるすばらしい信仰者や偉人とされる人々、どこに行くのかを知らないで出て行ったアブラハム、エジプトという異教の地で育てられたモーセ、モアブ人であったルツ、使徒4：13のペテロとヨハネ、マタイ15：21－28のカナン人の女、マタイ8：5－13の百人隊長など、これらの人たちを見た時、神に用いられるためには、必ずしも神学校に行くなどの専門的な聖書の学びを受けないといけないということではないということに同意して下さると思います。

☆あなたが神に用いられるために必要なこととは?

今日のみことば(出エジプト3：1－12)は、神学校に行くとか、聖書の学びを蓄える以前に(もちろんこれらも有益ですが)、私たちクリスチャンたちにとって大切なことがあるということをお教えています。今日と来週とで、出エジプト記3：1－12を通して、私たちがより神に用いられるために必要なことを三つ、皆さんとご一緒に見て行きたいと思えます。

さて、神はイスラエルの民をエジプトの圧制から救うために、60万人以上のイスラエル成人男子の中から「モーセ」という人物を選ばれました。出エジプト記3：10、12を見ると「あなたを遣わす」ということばがあります。神はこの時、モーセを遣わすために、言い換えれば、神の尊いご計画によって、このモーセを用いるためにいくつかのことを教えようとしておられるのです。みことばを見ましょう。

出エジプト3：1－12

- 1 モーセは、ミデヤンの祭司で彼のしゅうと、イテロの羊を飼っていた。彼はその群れを荒野の西側に追って行き、神の山ホレブにやって来た。
- 2 すると主の使いが彼に、現われた。柴の中の火の炎の中であった。よく見ると、火で燃えていたのに柴は焼け尽きなかった。
- 3 モーセは言った。「なぜ柴が燃えていかないのか、あちらへ行ってこの大いなる光景を見ることにしよう。」
- 4 主は彼が横切つて見に来るのをご覧になった。神は柴の中から彼を呼び、「モーセ、モーセ。」と仰せられた。彼は「はい。ここにおります。」と答えた。
- 5 神は仰せられた。「ここに近づいてはいけない。あなたの足のくつを脱げ。あなたの立っている場所は、聖なる地である。」
- 6 また仰せられた。「わたしは、あなたの父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」モーセは神を仰ぎ見ることを恐れて、顔を隠した。
- 7 主は仰せられた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の悩みを確かに見、追い使う者の前の彼らの叫びを聞いた。わたしは彼らの痛みを知っている。
- 8 わたしが下つて来たのは、彼らをエジプトの手から救い出し、その地から、広い良い地、乳と蜜の流れる地、カナン人、ヘテ人、エモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人のいる所に、彼らを上らせるためだ。
- 9 見よ。今こそ、イスラエル人の叫びはわたしに届いた。わたしはまた、エジプトが彼らをしいたげているそのしいたげを見た。
- 10 今、行け。わたしはあなたをパロのもとに遣わそう。わたしの民イスラエル人をエジプトから連れ出せ。」
- 11 モーセは神に申し上げた。「私はいったい何者なのでしょう。パロのもとに行ってイスラエル人をエジプトから連れ出さなければならぬとは。」
- 12 神は仰せられた。「わたしはあなたとともにいる。これがあなたのためのしるしである。わたしがあなたを遣わすのだ。あなたが民をエジプトから導き出すとき、あなたがたは、この山で、神に仕えなければならない。」

I. 罪を清算する 2-6節

まず初めに、神がモーセに呼びかけたすぐ後に言われたことは、出エジプト記3：5 b「ここに近づいてはいけない。あなたの足のくつを脱げ。あなたの立っている場所は、聖なる地である。」ということでした。これはいったいどういうことでしょうか？ これは、神のおられる場所は「聖なる地」である、つまり、神とは聖なる、聖いお方であるということなのです。みことばははっきり教えています。神とは、聖なる、聖いお方であるということ。実は、ここで神がモーセに言われた「くつを脱ぐ」という行為は、当時から、この地方では宗教的に聖い場所に入る時の習慣だったのです。例えば、イスラエルなどの中東に行かれた方はご存じと思いますが、今でも、イスラム教などの寺院や神殿に入る時は必ず靴を脱ぎます。このことから、神とは聖なるお方だからその神に用いられるためには、私たちが聖くなければならないということが分かります。しかし、私たちの心の中を見た時、決して「自分は聖い、この聖い神に自分の心の隅々まで見られたとしても、何一つやましいことはない」と、そう断言できる人はいないはず。だから、私たちが神に用いられるために必要なこと、決して避けて通ることのできないことというのは、私たちの「罪を清算する」ということです。では、その罪を清算するために必要なことは何でしょう？

(1) 罪の赦し=救いをいただくこと

その第1番目は「罪の赦し」です。言い換えると救いをいただくことです。そのことを順に見ていきましょう。この2節に出てくる「主の使い」とは、明らかに、神ご自身がモーセに見える形で現われてくださったものです。何故なら、続く4節以降で、同じ存在が「主」とか「神」と言い換えられ、6節ではその者がはっきりと「わたしは、あなたの父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」と語っていることから分かります。

その神はどのような形でモーセご自身に示されたのでしょうか？「火」によってです。2節「すると主の使いが彼に、現われた。柴の中の火の炎の中であった。よく見ると、火で燃えていたのに柴は焼け尽きなかった。」。実は、この時まで、神は何度かご自身を現わすのに「火」を用いてこられました。例えば、創世記15章を見ると、ここで神はアブラハムと契約を結ばれましたが、そこでこのようなシーンがあります。創世記15：17「さて、日は沈み、暗やみになったとき、そのとき、煙の立つかまどと、燃えているたいまつが、あの切り裂かれたものの間を通り過ぎた。」と、ここに出てきた「煙の立つかまどと、燃えているたいまつ」こそが、神を現わしているのです。少し分かりにくいかも知れませんが、この15章で神はアブラハムに約束を与えてくださっているのです。創世記15：7「また彼に仰せられた。『わたしは、この地をあなたの所有としてあなたに与えるために、カルデア人のウルからあなたを連れ出した主である。』」ということばがそうです。それに対して、アブラハムは主に質問を投げかけます。15：8「彼は申し上げた。『神、主よ。それが私の所有であることを、どのようにして知ることができましょうか。』」、すると神はアブラハムにこのように言われます。15：9「すると彼に仰せられた。『わたしのところに、三歳の雌牛と、三歳の雌やぎと、三歳の雄羊と、山鳩とそのひなを持って来なさい。』」、実は、これらのもの（雌牛…民数記19:2-10、雌やぎ…民数記15:27、雄羊…創世記22:13など、山鳩…レビ記1:14など）はみな、後に、神へのいけにえとして定められるものなのです。アブラハムは、それらを真二つに切り裂きます。15：10「彼はそれら全部を持って来て、それらを真二つに切り裂き、その半分を互いに向かい合わせにした。しかし、鳥は切り裂かなかった。」、その後、神はアブラハムに対して約束、あるいは預言を語られます。15：13-16「そこで、アブラムに仰せがあった。「あなたはこの事をよく知っていなさい。あなたの子孫は、自分たちのものでない国で寄留者となり、彼らは奴隷とされ、四百年の間、苦しめられよう。:14 しかし、彼らの仕えるその国民を、わたしがさばき、その後、彼らは多くの財産を持って、そこから出て来るようになる。:15 あなた自身は、平安のうちに、あなたの先祖のもとに行き、長寿を全うして葬られよう。:16 そして、四代目の者たちが、ここに戻って来る。それはエモリ人の咎が、そのときまでに満ちることはないからである。」、そして、先程の出来事が起こるのです。

15：17-21「17 さて、日は沈み、暗やみになったとき、そのとき、煙の立つかまどと、燃えているたいまつが、あの切り裂かれたものの間を通り過ぎた。18 その日、主はアブラムと契約を結んで仰せられた。『わたしはあなたの子孫に、この地を与える。エジプトの川から、あの大川、ユーフラテス川まで。19 ケニ人、ケナズ人、カデモニ人、20 ヘテ人、ペリジ人、レファイム人、21 エモリ人、カナン人、ギルガシ人、エブス人を。』」、実は、これらは当時の契約の時に行なわれることだったのです。「もし、この約束を守ることができなかったら、自分はこの動物たちのように切り裂かれることさえいとわれない…」そんな意味を込めてこれらを行なうのです。神はこのような契約をアブラハムと結んでくださったのです。

また、罪の故に悪名高かったソドムとゴモラの町が滅んだ時もそうです。創世記19：24-25「24 そのとき、主はソドムとゴモラの上に、硫黄の火を天の主のところから降らせ、25 これらの町々と低地全体と、その町々の住民と、その地の植物をみな滅ぼされた。」とあります。このように「火」とは、ある時は神を現わし、罪に対する神のさばきを実現するために用いられたのです。新約聖書ヘブル12：29にも「私たちの神は焼き尽くす火です。」ともある通りです。

神とは聖いお方であり、それ故に、私たちにとっては恐ろしい存在でもあります。ですから、出エジプト記3：6に「また仰せられた。『わたしは、あなたの父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。』モーセは神を仰ぎ見ることを恐れて、顔を隠した。」とあります。何故なら、私たちは罪深いものであるが故に、その聖い神の前に、到底立ちおおせるような存在ではないからです。モーセは、そのことを良く分かっていたのです。

詩篇51：4-5を見ると「4 私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行ないました。それゆえ、あなたが宣告される時、あなたは正しく、さばかれる時、あなたはきよくあられます。5 ああ、私は咎ある者として生まれ、罪ある者として母は私をみごもりました。」とありますが、ここで、ダビデは、自分が罪を犯したことによって、神の前に罪人となってしまったことを嘆いているのでしょうか？それとも、自分が罪ある者として生まれたが故に、罪を犯してしまったことを嘆いているのでしょうか？どちらでしょう？明らかに後者です。彼は、罪ある者として生まれた、それ故に罪を犯してしまう…、罪を犯してしまったことを嘆いているのです。そして、罪ある者として生まれたのは、ダビデだけではありません。モーセもそうだし、私たちすべての人間は生まれながらに罪人なのです。エペソ2：1-3「あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、2 そのころは、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。3 私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあつて、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」、だから、誰に教えられなくても、自らの選択で罪を犯すのです。この詩篇51篇で、ダビデは、何度も神に対して罪の赦しと清めを請うています。1節「神よ。御恵みによって、私に情けをかけ、あなたの豊かなあわれみによって、私のそむきの罪をぬぐい去ってください。」、2節「どうか私の咎を、私から全く洗い去り、私の罪から、私をきよめてください。」、7節「ヒソブをもって私の罪を除いてきよめてください。」、9-10節「御顔を私の罪から隠し、私の咎をことごとく、ぬぐい去ってください。：10 神よ。私にきよい心を造り、ゆるがない霊を私のうちに新しくしてください。」。それは、4節にあるように、すべての罪は私たちが造り私たちが生かして下さっている神に対するものであるからです。

生まれつきの私たち人間には、何よりも自分の欲や願いを優先させたいとする思いがあります。神が私たちが造ってくださった目的、「わたしの名で呼ばれるすべての者は、わたしの栄光のために、わたしがこれを創造し、これを形造り、これを造った。」（イザヤ43：7）よりも、神のみこころよりも、自分の欲や願いを満足させたい、それが、聖書の教える「罪」なのです。ですから、まず、私たちに必要なことは、罪の赦し、つまり、救いをいただくことなのです。詩篇51：16-17にはこのようにあります。「16 たとい私がささげても、まことに、あなたはいけにえを喜ばれません。全焼のいけにえを、望まれません。17 神へのいけにえは、砕かれたたましい。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。」、神があなたに願っておられるのは、あなたの捧げる捧げ物や行ないではなく、あなた自身が神の前にたましいが砕かれて、自分自身の犯した罪を悔い改めることなのです。

イエスはルカ24：46b-47でこのように教えて下さいました。「46 …キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、47 その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。」。私たち罪ある人間が神から罪の赦しをいただくためには、あのイエス・キリストが私たちの罪の身代わりとなって苦しみを受け、約束通りに、死からよみがえってくださったということを信じ、自分の罪を悔い改めることが必要なのです。そうする時に、神が私たちに罪の赦しを与えてくださるのです。ヘブル11：6に「信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならないのです。」とある通りです。

●日々の罪の清め

では、信仰を持って罪を赦されていればそれだけで良いのかと言うと、そうでもありません。ペテロもこのように教えています。Iペテロ1：15-16「15 あなたがたを召してくださった聖なる方にならって、あなたがた自身も、あらゆる行ないにおいて聖なるものとされなさい。16 それは、『わたしが聖であるから、あなたがたも、聖でなければならない。』と書いてあるからです。」。神の聖さと私たちが無関係であってはならないのです。いや、それ以上に、私たちも、あの聖なる神に倣って、聖い者であるべきなのです。信仰の故に、罪の赦しをいただいた私たちにも、日々の罪の清めが必要だということを、イエスは最後の晩餐でこのように教えて下さいました。ヨハネ13：10b「水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身きよいのです。」と。また、ヨハネはこのように教えています。Iヨハネ1：9「もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちがきよめて下さいます。」と。私たちは罪を赦された後でも、日々、自分自身を見つめ直し、神の前に正しくない思いや行ないがあったなら、それを神に告白することによって神に清めていただくことが必要なのです。それなしに、私たちが

神に用いられることはありません。何故なら、神とは完全に聖い、聖なるお方であられるからです。もしかすると、私たちはこの大切なことを忘れてしまっていないでしょうか？神の聖さというものを忘れてしまって、何となく礼拝に来ていたり、奉仕をしていたり…と。間違いなく、そのような信仰者が神に喜ばれ、用いられることはないのです。

II. 神のみこころ (=みことば) に従う 7-10節

先程の「靴を脱ぐ」(3:5)という行為は、靈的に聖いという意味以外に「自分がしもべである」ということを受け入れる行為でもあるのです。「自分は神のしもべである」ということを受け入れるということは、当然、その神に従うということの意味します。神に用いられるために必要な第2番目のことは、神に従うことです。神のみこころに、神のみことばに従うことなのです。

このことに関しては、言うまでもなく、多くの聖書の箇所によって明らかです。今回のテキストでも、出エジプト記3:8で「**わたしが下って来たのは、彼らをエジプトの手から救い出し、その地から、広い良い地、乳と蜜の流れる地、カナン人、ヘテ人、エモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人のいる所に、彼らを上らせるためだ。**」と、先程見た創世記15:18-21の、神がアブラハムに誓われたそのことの実現のために、ご計画をもって、これからモーセを用いようとしておられることが明確に教えられています。そして、出エジプト記3:10「**今、行け。わたしはあなたをパロのもとに遣わそう。わたしの民イスラエル人をエジプトから連れ出せ。**」とあるように、神はモーセに具体的な指示を与えます。そういった神の命令は、今回のテキストの後、もつともつと数多く、モーセに対して与えられます。

私たちはこの神のしもべなのです。そのことは、皆さんがこの神を、イエスを信じた時に、同時に受け入れたはずです。なぜなら、このお方は神なのです。あなたをお造りになり、あなたを生かして下さっているばかりか、あなたを罪から救い出してくださったお方なのです。マタイ7:21、24-27を見てください。「**21 わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。… 24 だから、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行なう者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができます。 25 雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけたが、それでも倒れませんでした。岩の上に建てられていたからです。 26 また、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行なわない者はみな、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができます。:27 雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまいました。しかもそれはひどい倒れ方でした。**」。ここでもはっきりと教えられているように、本当に救われた信仰者は、神のみこころを行なおうとし、神のみことばに従うのです。なぜなら、このお方を、自分の信じ仕えるべきお方、つまり、自分の主人であるということを受け入れているからです。

私たちが、本当に、神に用いられるために必要なのは、世の中の教えや、自分自身の考えや願い、目標といったようなものではなく、ただ、このみことばに従うこと、つまり、神に従うことが必要なのです。みことばにこそ、私たちが信じ従うべき、神のみこころが記されているのです。

さて、今日、皆さんに覚えていただきたいことは、神は40歳の時のモーセを召し、用いようとはされなかったということです。40歳の頃の、あの若かったモーセではなく、80歳になってからの、老いを感じさせる、そんなモーセを敢えて神は選び、神のみわざのために用いられたのです。信仰とは、日々、成長していくものです。私たちは、昨日よりも今日、今日よりも明日と、より成長し、より、神に喜ばれる者へと変えられて行っているはずです。それなら、私たちは多少肉体は衰えていても、躊躇する必要はありません。神は、皆さんを日々成長させ、用いようとしておられるのです。ですから、どうか、主に用いられるということに関心をなくさないでください。いつまでも、いつまでも、神の前に、「どうぞ、私を用いてください！」と言う、そのような信仰者であっていただきたいと思います。